

「学びの変革」 授業デザイン

～すべての子どもに資質・能力を確実に育成するために～

GIGA スクール構想による1人1台端末の導入、中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の公表等、学校教育を取り巻く状況は大きく変化し、学校の在り方や、これまでの授業観等の転換が求められるようになりました。これらを踏まえ、第7次福島県総合教育計画の年次計画である「学びの変革推進プラン」には、『学びの変革』によって資質・能力を確実に育成することを掲げています。

「気になるあの子のよさを伸ばしたい」
「授業の中で、1人1台端末をもっと効果的に活用したい」
「話合いのコーディネートが大切なのは分かるけれど…どうしたらいいの」

このような先生方の思いや悩みを受けて、県内で広く活用が図られてきた「ふくしまの『授業スタンダード』」を改訂することとしました。

『学びの変革』授業デザインには、すべての子どもに学びを保障するための支援の在り方や、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るためのポイントを示しました。

福島県で頑張るすべての先生と子どもたち相互の Well-being（一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せ）を実現するために、「オール福島」で共通実践を積み重ねていきましょう。

使い方

- 課題意識をもっているところから活用してください。
 - ・【「観」を見つめて】【創意工夫のある単元（題材）づくり】 …… P 1, 2
 - ・【学び出す】【学び合う】【学び取る】【主体的・対話的で深い学びの実現に向けて】
【授業づくりのポイント】【誰一人取り残さないために】 …… P 3～5
 - ・【学び続ける】 …… P 6
- 授業の振り返りや校内研修で活用してください。
 - ・【授業の基盤を整えるために】【授業の充実のために】 …… P 7

「観」を見つめて

教師がもつ「観」は、授業づくりや働きかけ、子どもの学びの質を大きく左右します。子ども観、学力観、授業観、評価観といった自分の「観」がどのようなものなのかを振り返ってみましょう。



子ども観 子どもは、どのような存在ですか？

- 子どもは、自ら学びを進め、自ら成長していく存在です。
 - 教師が、一つ一つの指示を与えなければ、子どもは動けないと思っていませんか。
 - 教師の経験や価値観で、子どもの実態や学び方を決めつけていませんか。
- 「目の前の子どものありのままを受け止めましょう」
「子ども一人一人の力を信じ、引き出す支援の在り方を考えましょう」



学力観 どのような力を育てる必要があるのでしょうか？

- 学力とは、子どもが自分の生き方を切り拓くために必要な力、実生活で生きて働く力です。
 - 子どもが、課題を解決するための土台となる力は、知識・技能だけでしょうか。
 - 学習態度がまじめというだけで、学力が身に付いているのでしょうか。
- 「何ができるようになるかを見据え、子ども一人一人に必要な資質・能力をバランスよく育んでいきましょう」



授業観 どのような学びがふさわしいのでしょうか？

- 教師が教えるべきところ、子どもに任せるところのバランスをとることが大切です。
 - 教師が考える「唯一の正解」を、子どもに求める授業になっていませんか。
 - みんなで同じことを、同じようにすることを求めていますか。
- 「教師が『話す』授業から、教師が『みる』『きく』『つなぐ』授業へ」
「すべての子どもが学ぶ目的や学び方を理解し、自立した学習者として、学び続ける授業を目指しましょう」



評価観 何のために、子どもの何を、どのように見取り、評価していますか？

- 評価は、子どもの学習改善と、教師の指導改善につながるものにすることが大切です。
 - 子どもが自身の学びを振り返り、次に向かうことができるような評価になっていますか。
 - 努力を要する状況(C)にある子どもが、おおむね満足できる状況(B)に到達できるような支援の手立てを講じていますか。
- 「評定中心の評価から、子ども一人一人のよさと可能性を伸ばし、自己実現を援助する評価への転換を図りましょう」



一つの「観」にとらわれるのではなく、自分の「観」が子どもの実態や時代の変化にあったものなのか、絶えず見つめ直していくことが大切なのです。



目の前の子どもたちに合わせた単元（題材）づくりを！

「子どもたちに夢中で取り組んでほしい」「子どもたちをわくわくさせたい」
「さまざまな意見に出会わせて考えを深めさせたい」

創意工夫のある単元（題材）づくりは、目の前の子どもたちの学びたい気持ちを高め、主体的・対話的で深い学びへと誘います。下に示す手順やポイントを参考に、単元（題材）づくりに取り組みましょう。



単元（題材）づくりの手順

1 育成をめざす資質・能力を明確にします

- 年間指導計画を基に、単元（題材）の指導事項を確認したか。
- 学習指導要領で具体的な内容や系統性を確認したか。
- 上記を基に、単元（題材）の目標、評価など

2 単元（題材）終末の子どもの姿を具体的にイメージします

- 何が分かっているか。
- 何ができるようになっていくか。
- 実生活や次の学びにどのように生かせるようになっているか。 など

3 単元（題材）全体を考え、指導の計画を立てます

- 学習内容をどのような順序で指導するか。
- 単元（題材）のどこに、どの程度時間をかけて指導するか。
- 各時間で、重点を置いて指導することは何か。
- どのような方法で指導するか。
(ユニバーサルデザイン、合理的配慮*等を含む。) など

4 指導と評価の一体化を図ります

- 各時間で行う評価の観点・評価する方法を決めたか。（多様な評価方法を検討）
- 評価の観点は教師と子どもが共有できるものとなっているか。
- 子どもの学習改善・教師の指導改善につながる評価計画になっているか。 など

1 単位時間ごとの授業計画へ

ポイント

子どもたちの実態

を把握する

- ・ これまでの学びや経験
- ・ これまでの学習内容の定着
- ・ 予想されるつまずき（どの場面で、どのようなつまずきか、子どもの特性、学ば上での困難さも含む）
- ・ 学年に応じた発達の段階 など

※ 子どもの実態の把握には具体的なデータを用いる。
(レディネス、学力調査の結果等)

ポイント

教材の価値

を明らかにする

- ・ 教材の意図や背景の理解
- ・ 系統性や他の単元・他教科等とのつながり
- ・ 子どもの実生活や興味・関心とのつながり
- ・ 学びを深めるポイント（重点）
- ・ 出合わせ方・活用の仕方
(テキスト、実物、映像、図解、実験、体験 など)
- ・ 地域素材や地域人材の活用
- ・ 1人1台端末やデジタル教材の活用 など

※ 研究書籍や先行実践も参考にする。

ポイント

柔軟な指導計画

を構想する

- ・ 単元（題材）全体を見通す場面と振り返る場面の設定
- ・ 子ども主体で進める場面と教師主導で進める場面の適切な組み合わせ
- ・ 個別に学ぶ場面と集団で学ぶ場面の設定
- ・ 子ども一人一人が異なる方法等で学習を進める場面と、子ども一人一人が異なる目標を設定して学習を進める場面の設定
- ・ 多様な他者の異なる考え方を組み合わせてよりよい学びをつくる場面の設定
- ・ 一人一人のよさや可能性が生かされる場面の設定 など



学び出す

すべての子どもが結果の見通しや、解決方法の見通しをもち、自ら動き出そうとする導入にします。

教材との出会い

学習課題の把握

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて



教材との出会わせ方を工夫し、子どもの問いや思い・願いを引き出しましょう。



すべての子どもが、学習課題を理解しているかを確認め、共有しましょう。

<よい教材の条件>

- ☐ 課題を見つけやすいもの。
- ☐ 子どもの多様な見方・考え方、感じ方を引き出すことができるもの。
- ☐ 既習事項やこれまでの知識、経験等との「ずれ」を感じるもの。
- ☐ 自分と友達との感じ方や考え方の間に「ずれ」を感じるもの。



すべての子どもが解決の見通しをもって、自力解決に向かうことができるようにします。

教師が提示した解決方法を、すべての子どもに同じように取り組ませるのではなく、子ども一人一人に解決方法を考えさせ、選択・判断させることにより、学びはより主体的になります。



<学習課題設定のポイント>

- ☐ 子どもが追究する課題が、学習指導要領に示されている内容や単元の目標と対応している。
- ☐ 子どもが解決に向けての必要感をもっている。
- ☐ 子ども一人一人が、友達と追究することへの意欲をもっている。

すべての子どもに学びを自分事として捉えさせることが大切なのです。



子ども一人一人に応じた支援

子どもの実態	支援の具体例	
学習進度が速い子ども	☐ 見直しを促す ☐ 発展問題へ挑戦させる	☐ 別な方法を発見させる ☐ 教え合いの支援者にする
学習進度がゆっくりな子ども	☐ 追究する時間を確保する ☐ ヒントカード等を提供する	☐ 個別に支援する ☐ 取り組む課題を絞る
目立たない子ども	☐ 意識して声をかける ☐ その子どものよさを積極的に価値付け、学級全体に広げる	☐ 子ども同士で関わり合う機会をつくる
気になる子ども	☐ 分かりやすいルールを一緒につくる ☐ できることを認め、励ます	☐ 環境を調整する ☐ 管理職や保護者に相談する
発言することが苦手な子ども	☐ 個別に「どう思う」と声をかける ☐ 1人1台端末を活用して意見を表出する機会をつくる	☐ 話し合いを少人数で行う
作業に時間がかかる子ども	☐ 作業内容・方法を精選する ☐ 1人1台端末で板書事項の写真画像を記録する	☐ ノートに書くポイントを絞る



子ども一人一人の特性や興味・関心、得意分野を知り、それを授業に生かしていくことが重要です。

承認・称賛・価値付け

<承認>

- 子どもから出された考えや意見等は、正解、不正解を問わず、まずはすべてを受け止めましょう。
- 誤答を否定しないで、一緒に原因を考えたり、誤答を生かしたりした授業展開を工夫しましょう。

<称賛>

- できるだけ具体的な子どものよさを褒めましょう。学級全体の場で褒めるか、個別に褒めるかは、状況やその子どもの特性・発達段階に合わせて柔軟に判断します。
- 子ども同士の相互評価の場を位置付け、互いのよさを認め合うことができるようにしましょう。

<価値付け>

- 子どもの見方・考え方、学び方のよさを見取り、積極的に褒めて、学級全体に広げましょう。
- 教科等の特質に応じた見方・考え方、学び方のよさを子どもたちと共有していきましょう。

授業づくりのポイント

誰一人取り残さないために



「間違えても大丈夫」という心の安定が学びの基盤になります。



45-27=22 じゃないかな。



はるとさんの考えは分かるかな。



分かるよ。位ごとに計算しようとしたんだよね。



そうか、位ごとに計算すればいいのか。



だったら、5-7はできないから、十の位から1をかりて計算するといいいよ。



数ブロックを使って確かめてみようよ。



はるとさんのおかげで、計算の仕方が整理できましたね。



「先生や友達から大切にされている」という実感が、前向きに取り組む意欲を高めます。

わたしの気持ちを分かろうとしてくれてるな。

わたしは、みんなから頼りにされているな。



ぼくのことを認めてくれる友達がいる。

先生は、ぼくのことを信じてくれている。



やればできるかも。頑張ってみよう！



新しいことに、挑戦してみよう！



学び合う

すべての子どもが友達の話に耳を傾け、自分の考えを確かにし
たり、新たな考えに気付いたり、磨き上げたりする展開にします。

追究・解決



子どもが自己調整しながら、学習を進められるようにしましょう。



多様な他者と協働しながら、学習を進められるようにしましょう。

個別最適な学び

一体的な充実

協働的な学び

【指導の個別化】学習内容の確実な定着
すべての子どもが同じ目標を達成することを目指し、教材・学習時間・方法等を個に応じて柔軟に設定します。

わたしは、補助具で練習するよ。

ぼくは、動画で動きを確かめてみるよ。

友達に技のコツを聞いてみよう。

【学習の個性化】学習を深め、広げる
異なる目標に向けて、学習を深め、広げることができるように、子ども一人一人の興味・関心等に
応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供します。

学習課題 データを分かりやすく表現できるかな。

ぼくは、世界の国旗に使われている色の数を棒グラフで表すよ。

給食の好きな献立アンケートをとって、円グラフで表そうかな。

主体的・対話的で深い学び

授業の質的改善

○ 異なる考えであっても、組み合わせると、よりよい考えが生み出されることを実感できるような場面を設定します。

学習課題 アジア州はなぜ急速に経済発展したのか？

マレーシアは、外国企業を招いて経済を発展させてきたんだ。

西アジアの国々が発展した理由とは異なっているね。

外国とのつながりを生かしているところはインドと似ているね。

授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、さらにその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、一体的に充実して、授業改善につなげていくことが大切なのですね。



1人1台端末の活用

学び合いのコーディネート

- 【目的】
○ 端末の活用が目的ではなく、単元や本時の目標を実現する(資質・能力を育成する)ための手段として端末を使う。
- 【場面】
○ 効果的な活用場面を具体的にイメージする。
(単元・本時のいつ、どの場面で、どのように使うのか)
- 【焦点化】
○ 子どもの実態やねらいに応じて、活用場面を絞る。
○ ICTと非ICT(図書、ノート等)のベストミックスを目指す。
- 【活用方法】
○ 一斉学習、個別学習、協働学習、それぞれの場面に応じた効果を考え、教師が子どもに端末の活用方法を示す。
○ 子どもに端末の使い方を選択、自己決定させる。
- 【情報モラル】
○ 情報を安全に、正しく扱うための学習を計画的に実施する。

教師の働きかけ	コーディネートの具体例
思考を共有する 板書事項	☐ 話し合いの論点や視点を示す。 ☐ 考えを分類・整理する。(文字の大きさ・色、矢印等) など
思考を可視化する ツールの活用	☐ ホワイトボード、付箋、短冊等で考えを類型化する。 ☐ 1人1台端末の画面やノート等を見せながら話し合う。 ☐ 思考ツールやネームプレートを活用して話し合う。 など
思考をつなぐ 言葉がけ	【予想】「〇〇さんの式の意味を説明できますか」 「〇〇さんの考えの続きが言えますか」 【再生】「〇〇さんの説明をもう一度言えますか」 【換言】「〇〇さんの考えを別の言い方でも言えますか」 【要約】「〇〇さんの考えを簡単に言えますか」 【共感】「〇〇さんの気持ちが分かりますか」 【発見】「〇〇さんの考えのよいところはどこですか」 【補助】「〇〇さんの考えのヒントが言えますか」 など
思考を深める 問い返し	【事実】「それは、どういうことですか」 【方法】「それは、どのようにして考えたのですか」 【理由】「どうしてそのようになるのですか」 など



「自分で選択・判断し、頑張ることができた」という実感が、自分で考える力を育みます。

今日は、かたちの学習をします。点を線で結ぶ、棒を動かす、色板を組み合わせる、3つの方法で解けそうですね。みなさんは、どの方法を使って解決しますか。

どの方法にしようかな。わくわくするね。

点を線で結ぶ、棒を動かす、2つの方法に挑戦したいな。

わたしは、色板が得意だから、色板を使って解いてみよう。

学習の順序を選択させたり、解決方法を子どもたちに決めさせたりすることは、子どもたちの学習意欲を高めます。また、新聞やプレゼンテーションなど、表現方法を選択させることは、子ども一人一人の特性・強みを生かすことにもつながります。



互いを認め合い、励まし合い、支え合う共感的な人間関係が、協働的な学びを促します。

みなさんにとって、友達とは、どのような人ですか？

どんなことでも、思っていることを言い合える人が友達だと思います。

それも分かるな。わたしは、困っている時に助けしてくれるのが友達だと思うよ。

たしかに。あかりさんに付け足して、どちらか一方だけではなくて、お互いに助け合える関係が友達と思うな。

そうそう。それって、お互いのことを信頼しているってことだね。わたしにもいるよ。

お互いの考えを認め合いながら議論したことで、考えを深めることができましたね。



学び取る

すべての子どもが、今日の授業で「自分は何が分かり、何ができるようになったのか」を実感できる終末にします。

まとめ

振り返り



「何が分かり、何ができるようになったのか」を、子どもが自覚できるようにしましょう。



「どのように学習してきたか」を、子どもが自覚できるようにしましょう。

教師が一方的にまとめるのではなく、子ども自身の言葉で、学習課題に対応したまとめを表現できるようにします。

学んだことを活用する活動（適用問題、新聞づくり、演奏や運動による表現等）に取り組むことは、子ども一人一人に「分かった」「できた」と実感させる上で重要です。

<まとめのポイント>

- 子どものまとめが、本時の目標に達していない場合、必要な手立てを講じて、すべての子どもが目標を達成することができるようにしている。
- 学んだことや明らかになったことを子どもから引き出すようにしている。（発問例）
 - ・ どのようなきまりや法則があるか。
 - ・ どうすれば問題が解決しやすくなるか。
 - ・ 最終的な自分の考えや意見はどうか。
 - ・ 共通していることは何か。 など

子どもの学びの姿から、自分の指導を振り返り、次に生かすことが大切なのですね。

個に応じた振り返りの視点（下図参照）を与え、子ども一人一人が自分の学びを意味付けることができるようにします。

<振り返りのポイント>

- A～Cの視点について振り返ることができるようにしている。
- 単元を通して、意図的・計画的な振り返りの場を設定している。

A 自分の成長や変容

B 獲得した知識・技能

C 解決の過程・学び方

授業のUD（ユニバーサルデザイン）※を意識した工夫

※授業のUDとは、障がいの有無に関わらず、すべての子どもが「分かる・できる」ように工夫された授業デザインのこと。

ポイント	具体的な取組例
○ 学習環境の整備 ○ 板書のきまり	□ 黒板から授業に不要な掲示物等は外し、黒板に注目しやすいようにする。 □ 色チョークの使い方やマークなど、板書のきまりを学校全体で統一する。
○ 授業構成の工夫	□ 黒板に1時間の授業展開を掲示し、すべての子どもが見通しをもてるようにする。 □ 「何を」「どの順序で」「どのような方法で」取り組むのかを具体的に伝える。
○ 指示・説明の工夫	□ 指示は抽象的な言葉を少なくし、短い文章で順序をつけて話をする。 □ 説明する時、言葉だけでなくイラストや図等を活用し、視覚的に捉えやすくする。
○ 学習形態の工夫	□ ペアやグループなど話しやすい形態で、すべての子どもが話せる環境をつくる。 □ 子ども同士で学び合えるように、座席配置を工夫する。
○ 一人一人の学び方に 応じた支援	□ 定着度や理解の差に対応するため、個別の手順書やヒントカードなどを活用する。 □ 読み上げや拡大機能等、多様な学び方に対応するために1人1台端末を活用する。 □ 書き出しやキーワードを与え、書くことへの負担を軽減する。

子どもの実態や学ぶ上での困難さに応じて、柔軟に工夫をしていくことが大切です。

振り返りの視点

【A 自分の成長や変容】
「授業(単元)で、どのようなところが成長したと思いますか」
「授業(単元)で、どのようなところが変わりましたか」 など

【B 獲得した知識・技能】
「授業(単元)で何が分かりましたか」
「授業(単元)で何ができるようになりましたか」 など

【C 解決の過程・学び方】
「今日は、どのような学び方がよかったと思いますか」
「課題を解決することができたのは、どうしてですか」
「次は、どのようなことに取り組みたいですか」 など



「自分はやればできる」という実感が、子どもの自己有用感を高め、学ぶ意欲を高めます。

夕日に照らされた山を背景にして、中央に大きくリンゴを描きました。グラデーションを使って、空の着色を工夫しました。

りんごと夕日の色の組み合わせがすごくいいね！

空のグラデーションがすてきだね。参考してみるよ。

みんなが、わたしの作品をほめてくれてうれしかったな。また頑張ってみよう！



互いを認め合い、助け合い、高め合う学級の風土は、日々の積み重ねでつくられます。

ぼくの考えは・・・

焦らなくても大丈夫だよ。みんな最後まで聞くら。

どうしよう。考えをうまく伝えられない。

この学級で、みんなと一緒によかった。

みんなが困っているときは、ぼくが助けてあげたいな。



学び続ける

家庭学習の内容及び方法等を見つめ直すことにより、すべての子どもに「自己マネジメント力」を育みます。

「全員に同じ漢字を同じ回数書かせる」「全員に計算ドリルを何度もやらせる」など、目的が曖昧なまま、教師が子どもにやらせるだけの画一的な課題になっていませんか？



個別最適な学びの視点から

家庭学習は「個別最適な学び」を進める絶好の機会です。子どもが「自分で選ぶ、自分で決める、自分で進める」学びを広げていきましょう。

- 子どもの興味・関心や学習の進度、習熟度等は、一人一人異なります。多様な学習方法や教材等を提供することで、子どもが自分に合った方法や内容を選択し、主体的に学び続けることができるようにします。
- 1週間や2週間等、子どもの実態に応じた十分な期間の中で、同じ目標に向かって、子どもが自分のペースで課題に取り組むことができるようにします。
- 子どもの実態に応じた複数の課題を準備し、子どもが自分に合った課題を選択して取り組むことができるようにします。
- 子どもが、興味・関心に応じて自ら学習に取り組む機会を保障します。

実践事例は
こちら



ふくしまの「家庭学習スタンダード」を活用した家庭学習の充実に向けた実践事例集VOL.2

1人1台端末の活用

学習方法の1つとして、1人1台端末を活用することで、子ども一人一人の実態に応じて、取り組む内容や量、時間等を調整することができます。子どもが、自分で目標を決めて取り組めるようにしましょう。

- スタディログ（学習履歴）から、子ども一人一人の学習状況や進捗等を把握して、個に応じた支援につなげていくようにします。
- デジタルドリル等を活用し、子どもが自分の得意な問題やつまづきやすい問題を知ること、自らの学びを調整する力を育んでいきます。
- 1人1台端末を活用して自主学習ノート等に情報を収集したり、調べ学習をしたりすることで、子どもの興味・関心に応じた課題や学習活動に取り組むことができるようにします。

実践事例は
こちら



ふくしまGIGAスクール
リーフレット



協働的な学びの視点から

授業とつながる家庭学習に取り組むことで、学びが連続します。授業では、子ども一人一人が考えてきた意見を交流することで、よりよい学びにつなげていきましょう。

- 事前に授業につながる課題を提示し、子ども一人一人が自分の考えをもっておくことで、授業ではじっくり学び合うことができるようにします。
- 子どもが事前に資料や教科書を読んでおくことで、授業に時間的なゆとりが生まれます。授業では、これまで以上に子ども同士が関わることのできる時間を増やしていくようにします。
- 授業で学んだことを発展・深化する課題に取り組むことで、次時以降、子ども同士が活発に交流し、学びが広がるようにします。



家庭や地域と連携しながら、子どもが集中して学習に取り組める環境や習慣をつくることも大切ですね。



子ども一人一人の頑張っている過程を認め、称賛することで、自信につなげられるようにしていきましょう。

このチェックシートは、『学びの变革』授業デザイン」を基に、日々の授業づくりや実際の授業を振り返る際に活用するものです。「自己の重点事項を決める」「授業参観の視点として使う」「新たな項目を付け加える」など、工夫してご活用ください。

〈授業の基盤を整えるために〉

番号	項 目	チェック	ページ
1	子ども一人一人の特性や興味・関心、得意分野等の実態を把握し、支援策を考えている。	4 3 2 1	2・3
2	単元（題材）を通して育成を目指す資質・能力を明確にしている。	4 3 2 1	2
3	単元（題材）終末の子どもの姿を具体的にイメージしている。	4 3 2 1	2
4	単元（題材）全体を見通した指導計画・評価計画を明確にしている。	4 3 2 1	2
5	分からないことを「分からない」と言える安全・安心に学べる学級になっている。	4 3 2 1	3
6	1人1台端末の活用について、その目的や活用場面を明確にしている。	4 3 2 1	4
7	授業のユニバーサルデザインを意識した工夫を取り入れている。	4 3 2 1	5
8		4 3 2 1	
9		4 3 2 1	

〈授業の充実のために〉

番号	項 目	チェック	ページ
1	教材との出会いにより、子どもが「考えてみたい」「やってみたい」という思い・願いをもっている。	4 3 2 1	3
2	学習課題に対して、子どもが多様な見方・考え方をもちことができている。	4 3 2 1	3
3	すべての子どもが結果の見通しをもったり、解決方法の見通しをもったりしている。	4 3 2 1	3
4	すべての子どもが「友達の考えを聞きたい」、「自分の考えを話したい」という必要感をもって話し合っている。	4 3 2 1	4
5	異なる考えであっても、組み合わせたり、視点を変えたりすることで、よりよい考えが生み出されるということを、子どもが実感している。	4 3 2 1	4
6	教師のコーディネートにより、子どもが集団で学び合うことができている。	4 3 2 1	4
7	子どもが、自分に合った学習内容や方法を選択することができている。	4 3 2 1	4
8	授業のまとめにおいて、子どもが「何が分かったのか」「何ができるようになったのか」を、自分の言葉で表現することができている。	4 3 2 1	5
9	個に応じた振り返りの視点を与えることにより、子どもが自分自身の学びを意味付けることができている。	4 3 2 1	5
10	教師が話しすぎることなく、子どもが話し合ったり、活動したりすることができている。	4 3 2 1	3～5
11	1～10における子どもの学びの姿から、自分の指導を振り返っている。	4 3 2 1	3～5
12		4 3 2 1	
13		4 3 2 1	

メモ